

# 「宣教」とは何か

## 教会の使命に関する一考察

篠原基章

(東京基督教大学助教)

### 序 論

宣教思想史において宣教の概念は様々な意味合いで解釈されてきた。『宣教のパラダイム転換』において、デイヴィッド・ボッシュ (David J. Bosch) は宣教の定義について次のように記している。「宣教の定義というものは選択し、検討し、新しい表現を与え、また捨てるというプロセスである」<sup>1</sup>。20世紀の宣教思想の歴史はまさに教会が自らの使命を定義し、さらに定義し直すことの積み重ねであった。宣教を定義することは、教会がこの世界において何をどのように召されているかを定義することである。それゆえに、宣教の概念を意識的に定義していくことは重要である。

福音派は伝統的に宣教を失われた魂を救う救霊の働きとして理解し、宣教を伝道の同義語として規定する傾向がある。『ローザンヌ誓約』以降においても、この理解は福音派のエートスとして今も根強く息づいている。この理解は福音派のみならず、日本キリスト教協議会の教会派に属する人々にも見られるものである。吉田信夫氏はB・C・ジョンソンの著作である『これからの福音宣教像——神学と方法の再考』の翻訳において宣教 (mission) を「伝道活動」と訳出している<sup>2</sup>。最近では元東京神学大学学長であった近藤勝彦氏は『伝道の神学——21世紀キリスト教伝道のために』において明確な意図をもって「ミッション」を「宣教」ではなく「伝道」と訳している。この背景には日本キリスト教協議会において、教会の使命が「宣教」の用語と概念によって拡大解釈され、福音を宣べ伝える「伝道」の意味と位置

1 デイヴィッド・ボッシュ、東京ミッション研究所訳『宣教のパラダイム転換 下巻——啓蒙主義から21世紀に向けて』(東京ミッション研究所選書シリーズ4) 新教出版社、2002年、511頁

2 B. C. ジョンソン、吉田信夫訳『これからの福音宣教像——神学と方法の再考』日本基督教教団出版局、1996年、226-227頁

づけが曖昧にされてきたという反省があるからである<sup>3</sup>。また、その一方で伝統的なエキュメニカル派は宣教と伝道の両方を包括的な意味をもつ用語として理解し、両者を交換可能な同義概念と規定してきた<sup>4</sup>。さらにもう一方で宣教と伝道の両者を個別的な意味内容をもつ用語として使用される場合もある。しかもその意味内容は実に様々である<sup>5</sup>。

この小論は20世紀のプロテスタント宣教思想史において出現してきた主要な議論を踏まえ、教会の宣教的本質との関係において教会の使命について論じることを目的とする。第1節では宣教の語源的な意味内容を確認する。第2節では20世紀のプロテスタント宣教思想史において出現したミッシオ・デイ（神の宣教）の概念をめぐる議論を検討する。第3節ではエキュメニカル派に対する反動として生まれた福音派の宣教観の歴史の変遷を概観しつつ、特に社会的責任と伝道の関係性の議論について検討していく。第4節では全体の議論を踏まえ、教会の使命の3つの要素（ケリュグマ、ディアコニア、コイノニア）について論じていく。

## 第1節 「宣教」(Mission)の語源的意味

キリスト教神学における「ミッション」(mission)の用語は、一般的に日本語で「宣教」と訳されてきた。日本語訳における「宣教」の字義的な意味は「教えを宣べ伝える」ことであり、またその意味内容も伝道ないしは布教活動の同義語として理解される傾向がある<sup>6</sup>。しかしながら、この訳語は訳出された当時の歴史的背景の中における限定的な解釈として理解されなくてはならないであろう。すなわち、この訳語が作られた当初にあって、教会の使命はまさに「教えを宣べ伝えること」と理解されていたからである<sup>7</sup>。しかし、後述するように、語源的意味において「宣教」は本来「派遣」という意味内容を持っている。宣教の語源的意味内容と日本語におけ

3 近藤勝彦『伝道の神学—21世紀キリスト教伝道のために』教文館、2002年、5-6頁

4 David J. Bosch, "Evangelism: Theological Currents and Cross-Currents Today," in *The Study of Evangelism: Exploring a Missional Practice of the Church*, eds, Paul W. Chilcote and Lacey C. Warner, 4-17 (Grand Rapids: Eerdmans, 2008), 5-6.

5 Bosch, "Evangelism," 6-8を参照。

6 新改訳聖書において「宣教」という用語は「ケリュグマ」（宣べ伝える、説教）の訳語として用いられている（マタイ4:17；使徒14:7；Iコリント15:14など）。

7 M・シーゲル『福音と現代—宣教学の視点から』（南山大学学術叢書）サンパウロ、2005年、4-5頁

るそれとの間にギャップが存在することに留意することは重要である。

英語の「ミッション」(mission)はラテン語の“missio/mitto”(sending/to send)から派生した用語であり、聖書的な語義は「派遣」を意味するギリシャ語のアポステローに由来する。使徒を意味するギリシャ語のアポストロス(Apostolos)はアポステローの派生語である。すなわち、宣教は元来「派遣されること／遣わされること」を意味する。そもそもラテン語の「ミッシオ」は三位一体の教理を表す用語であった。すなわち、父なる神が御子を遣わし、父および御子なる神が聖霊を「発出」することを「ミッシオ」という用語で表現した。後に、この「ミッシオ」は、神の人類の救いのための御子キリストの「派遣」との関連で用いられるようになる。『新カトリック大辞典』において、「ミッシオ」は神による子なるキリストの派遣との関連において次のように説明されている。

人類の救いは全き神の主導に基づく恩恵による。このような神の普遍的救済意志(Ⅰテモ2:4参照)から、神は子イエスをキリスト(メシア、救い主)としてこの世に派遣した。この派遣という言葉自体が、ラテン語のミッシオ(missio)という語源の原意である。<sup>8</sup>

三位一体における御子が父によってこの世に救い主として遣わされた。これこそが最初のミッシオであり、語源的用法において「ミッション」は神の使命／派遣という神学的モチーフを持っている。20世紀の宣教思想史はこの派遣の概念の意味内容をめぐって展開していくことになる。

## 第2節 20世紀における宣教概念の展開

20世紀における宣教会議の歴史は宣教概念を明確化するためのプロセスであったといえる。その中で中心的な役割を果たしたのが「ミッシオ・デイ」(Missio Dei)の概念であった。世界全体が過渡的状況にある中で、ミッシオ・デイの神学は新しい宣教思想の視座を提供し、それ以降の宣教論に決定的な影響を及ぼした。その宣教思想は、時に「トロイアの木馬」のようにその宣教概念の内部から革命的な混乱を生じさせることもあったが<sup>9</sup>、なおもそれらを通して教会の使命理解はより

8 新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』第3巻、研究社、2002年、823頁

9 H. H. Rosin, *Missio Dei: An Examination of the Origin, Contents and Function of the*

明確なものとしてされていく。本節において、ミッシオ・デイ概念を軸にしつつ、20世紀のプロテスタント宣教思想史における宣教概念について検討していく。

### (1) 海外布教活動としての「ミッション」

16世紀以降の大航海時代において、キリスト教徒たちは植民地化された国々に派遣され、布教活動を行った。イエズス会の創立者であるイグナチオ・ロヨラはこの布教活動を「ミッション」と呼んだ最初の人物である<sup>10</sup>。そのような中で、非キリスト教国にキリスト教信仰を伝える働きに従事する人たちを「ミッシヨナリー」(宣教師)と呼ぶようになった。布教活動としての「ミッション」理解が定着したのは16世紀以降のことである。

このような理解は今日においても一般的にみられるものである。現代においてキリスト教国/非キリスト教国という区別は妥当性を失いつつあるが、「宣教」と「伝道」の用語を国の内外におけるキリスト教を伝える働きを区分する用語として一般的に用いられている。すなわち、海外での布教活動を「宣教」と呼び、国内でのそれを「伝道」とする用例である。「宣教」を海外における布教活動とする理解は16世紀以降から20世紀初頭に至るまでのおよそ400年間に渡り広く浸透してきた。

### (2) 宣教の起源としての「ミッション」

19世紀の宣教は主に西洋諸国のキリスト者が非西洋諸国の人々に福音を宣べ伝え、滅び行く魂を救い出すという救済論的な枠組みの中で理解されてきた。それは時に数量的拡張を目指す運動となり、競争原理に基づく特定の教派的教会の拡張運動という要素を含むこともあった。また、しばしば宣教はキリスト教の優越性に基づく文化的・社会的啓蒙活動と混同されることもあった<sup>11</sup>。いずれにせよ、宣教の主体は教会であり、その宣教思考は布教活動を機軸とするパラダイムを土台としたものであった。

しかし、20世紀における脱植民地主義(ポスト・コロニアリズム)の時代的潮流の中で、「旧来の教会」(older churches)と「若い教会」(younger churches)との関係が注目されるようになり、西欧の宣教師たちによる一方的な宣教の在り方

---

*Term in Protestant Missiological Discussion* (Leiden: Inter-university Institute for Missiological and Ecumenical Research, 1972), 26.

10 Karl Müller, *Mission Theology: An Introduction* (Nettetal: Steyler Verlag, 1987), 30.

11 ボッシュ、前掲書、390頁

に再検討が加えられていく。また西洋キリスト教国の世俗化が急速に進む中で、キリスト教国と非キリスト教国という区別は意味をなさなくなる。そのような背景の中で、「ミッション」の概念を根源的に捉え直そうとする神学的な運動が生まれた。その運動は「ミッシオ・デイ」（神の宣教）の宣教思想として結実する。ミッシオ・デイの宣教思想は時に概念のインフレーションを起こしつつも、教会の宣教理解に決定的な方向転換を促した。

この新しいパラダイムの出現に貢献したのはカール・バルト（Karl Barth）である。ヨハネス・オーゴート（Johannes Aagaard）は、バルトを「この時代において決定的重要性をもったプロテスタント宣教学者」と評している<sup>12</sup>。バルトは1932年のブランデンブルク宣教会議での発題において、明瞭な形で宣教を神ご自身の活動において論じた。この宣教思想は1952年に西ドイツのウィリンゲンで開催された国際宣教協議会（International Missionary Council）の宣教会議において花開くことになる。ウィリンゲン会議において、宣教は布教活動という教会論の枠組みではなく、三位一体の文脈の中で再解釈された。すなわち、宣教は教会に属するものではなく、根源的な意味で神ご自身の性質と活動に属するものであると理解され、教会はこの世における神の宣教の業に参与する器としての明確な神学的位置づけが与えられた。

ウィリンゲン会議において、ミッシオ・デイの概念はキリストの贖罪論との強い結びつきの中で捉えられていたことは明記されなければならない。すなわち、神の宣教の業は御子の十字架によって成就されたというキリストへの信仰が基調とされていたということである<sup>13</sup>。ウィリンゲン会議の講演は「十字架のもとにある宣教」（*Missions under the Cross*）という題で出版されたが、そこには神の宣教におけるキリストの贖罪の業に対する確信と信仰が表明されている<sup>14</sup>。しかし、ウィリンゲン会議以降、ミッシオ・デイの概念はこの理解から離れ、この世における神の正義の実現を基調とした宣教のパラダイムへと転換していくことになる。

12 Johannes Aagaard, "The Main Trend in Modern Protestant Missiology," *Studia Theologica* 19 (1965): 238.

13 International Missionary Councils, *Missions under the Cross: Addresses Delivered at the Enlarged Meeting of the Committee of the International Missionary Council at Willingen, in Germany, 1952; With Statements Issued by the Meeting*, ed. Norman Goodall (London: Edinburgh House, 1953), 189-90.

14 David J. Bosch, *Witness to the World: The Christian Mission in Theological Perspective* (Atlanta: John Knox, 1980), 179.

### (3) 教会の宣教的性質

ミッシォ・デイの概念は教会の宣教的使命に関して決定的な影響を及ぼした。従来<sup>15</sup>の理解において、宣教は教会の宣教活動を指して用いられてきたが、「神の派遣」の宣教思想において、教会は本質的に宣教的であると理解された。すなわち、宣教は教会がなすべき多くの働きの一つではなく、教会の本質的使命として位置づけられたのである。

この教会の派遣的性質を基調とした教会論を展開したのはやはりカール・バルトであった<sup>15</sup>。バルトは次のように記している。「教会の宣教（教会が「遣わされること」）は、教会の存在にとって二次的な事柄ではない。すなわち教会は遣わされることにおいて、そして教会の宣教のために教会自身を建てあげることに存在する」<sup>16</sup>。すなわち、教会の存在目的はこの地上にあってキリストの派遣の使命に生きる共同体となるということである。

さらに、教会がこの地上に派遣された存在であるとするならば、教会は自己を目的とした存在ではありえない。それゆえ、教会は「他者のための存在」であり、「この世のための教会」として規定される。宗教改革以降の教会論において、教会は福音の純粹な説教、正しい聖礼典の執行、そして誤りを矯正するための教会戒規の執行という3つのしるしによって規定されたが、バルトは宗教改革者たちの教会論の欠損は「彼らによって語られなかったこと」にあると指摘した<sup>17</sup>。すなわち、「教会は何のために存在するのか」という問いである。バルトは教会の存在の意味を派遣的（宣教的）本質に求めた。それゆえ、教会はこの派遣的本質のゆえに、自己目的化することを許されず、常に「この世のための教会」として位置付けられなければならないと理解された。D・ボンフェッファーも同様に、教会を自己目的のためではなく、他者のための存在として捉え、次のように記している。「〔教会は〕他者のための存在（für andere da sein）である時にのみ教会である」<sup>18</sup>。

15 Johannes Blauw, *The Missionary Nature of the Church: A Survey of the Biblical Theology of Mission* (New York: McGraw-Hill, 1962), 169.

16 ボッシュ、前掲書、203頁からの引用。

17 カール・バルト、井上良雄訳『地上を旅する神の民—バルト「和解論」の教会論』新教出版社、2008年、167頁

18 D・ボンフェッファー、倉松功・森平太訳『抵抗と信徒』新教出版社、1964年、275頁

「神の宣教」において、教会はこの地上にあって派遣された宣教の民として理解される。ミッシオ・デイは宣教と教会の双方に先行し、それらを不可分のものとして結び合わせる。レズリー・ニュービギン (Lesslie Newbigin) はバルトの理解を受け継ぎ、教会を宣教的使命との関係において捉えた宣教的教会論 (missionary ecclesiology) の展開に大きく貢献した<sup>19</sup>。

#### (4) 批判的考察

ミッシオ・デイの概念は宣教の起源についての明確な理解を提供した。また、宣教を「神の宣教」とする理解は、それ以前の狭められた宣教観から教会を解放し、教会と宣教の関係を新鮮な視座において捉え直すことを促した。しかし一方で、ミッシオ・デイは「トロイアの木馬」のたとえのように、宣教思想を内側から変質させる運動をも生み出した。この節では、初期の理解から逸脱した一連の運動について問題点を整理しつつ、批判的に考察していく。

ミッシオ・デイの概念は宣教を神の活動であると規定した。この理解において、教会がこの世で達成すべき使命 (ミッション) をもっているのではなく、宣教 (ミッション) は神ご自身の発意に基づく活動として理解された。この考えをさらに推し進める理解、すなわち教会の宣教活動 (missions [複数]) と神の宣教の業 (mission [単数]) との間に明確な区別を設けるパラダイムが出現してくる。宣教は神の主権的な業であり、神の宣教の業は教会の宣教活動を超えて、この世の歴史の中において行われており、教会の使命はこの時代に働いている神の活動を見極めて、その業に参与することであると理解された。そして、従来の「神—教会—世界」というモデルから、教会と世界の神学的位置関係を逆転させ、「神—世界—教会」のモデルへの転換を主張したのである。この理解はオランダの宣教学者であるヨハネス・C・ホーケンダイク (J・C・Hoekendijk) によって指導された。ホーケンダイクは教会中心主義的傾向に対して、神の宣教の目標は教会にあるのではなく、神の

---

19 Lesslie Newbigin, *The Household of God: The Lectures on the Nature of the Church* (London: SCM Press, 1953); *One Body, One Gospel, One World: The Christian Mission Today* (London: International Missionary Council, 1958); *The Relevance of Trinitarian Doctrine for Today's Mission* (London: Edinburgh House Press, 1963) を参照。ニュービギンの宣教的教会論に関する研究は以下のマイケル・ゴーヒンの論文を参照。Michael W. Goheen, " 'As the Father Has Sent Me, I am Sending You': Lesslie Newbigin's Missionary Ecclesiology," *International Review of Mission* 9 (2002): 354-69.

究極的な目的はこの世におけるシャロームの樹立にあり、そのシャロームは世俗的な社会問題などの出来事であるとした。すなわち、ホーケンダイクは神の宣教は教会との関係ではなく、世界との関係において定義されるべきであると論じたのである<sup>20</sup>。しかし、こうした理解はバルトやミッシオ・デイの概念を用いた初期の指導者たちの意図に反するものであった。このような展開は、結果として宣教を世俗化の危険へと追い遣ることになってしまった。

この理解の問題点は、宣教の概念が拡大解釈されることで、宣教の中心が見失われているということである。世俗化されたパラダイムにおいて、宣教の中心はこの地上における神の正義の実現と規定された。トルムード・エンゲルスヴィケン (Tormod Engesviken) はこのようなミッシオ・デイ理解を “*missio Dei generalis*” と呼び、キリストによって実現した贖いの業を軸とする従来の理解 (“*missio Dei specialis*”) と区別している<sup>21</sup>。ミッシオ・デイの宣教理解は1974年のローザンヌ宣教会議においてジョン・ストットによって福音派陣営に紹介されたが、それは “*missio Dei specialis*” の枠組みにおいてであった。

ミッシオ・デイの概念は、広義において世界の秩序の回復と社会正義の実現として理解されたが、その問題点は神の宣教の中心であるキリストの十字架と復活によってもたらされた神の救済のご計画から離れたものとなってしまっていることである。「宣教は神の宣教 (ミッシオ・デイ) である」と認識することと、「宣教の中心はイエス・キリストの福音である」と告白することとの間に乖離があってはならないのである<sup>22</sup>。初期のミッシオ・デイの理解においてそうであったように、これら両者の命題は互いに不可分に結びついたものとして捉えられなければならない。ミッシオ・デイの概念はキリスト論という中心点を失ったとき、宣教は重力を失い、無重力の中の浮遊物になってしまう。中心点を失った宣教理解は拡張し続けることになる。ステファン・ニール (Stephen Neill) は「もしすべてが宣教ならば、すべてが宣教でなくなる」 (“If everything is mission, then nothing is mis-

20 Johannes Christiaan Hoekendijk, “The Church in Missionary Thinking,” *International Review of Mission* 41 (1952): 324-36; *The Church Inside Out* (Philadelphia: Westminster, 1966).

21 Tormod Engesviken, “Missio Dei: The Understanding and Misunderstanding of a Theological Concept in European Churches and Missiology,” *International Review of Mission* 92 (2009): 489.

22 ジェラルド・H・アンダーソン編、土井真俊訳『福音宣教の神学』日本基督教団出版局、1969年、323頁

sion.”) という有名な警鐘の言葉を残したが<sup>23</sup>、中心点を失った宣教はその危険性を帯びることになる。

### 第3節 福音派の宣教理解

この節では福音派の宣教観の歴史的な展開を辿りつつ、宣教と伝道の関係について検討していく。福音派の宣教思想はエキュメニカル派の中で主流となった広義の宣教理解に対する対抗運動として形成されていく。それゆえに、初期の形成期において反動的性格をもつこととなったが、その運動の本質は宣教における伝道の第一義性という主張である。

#### (1) 初期の宣教観

20世紀前半のエキュメニカルな宣教理論は1921年に設立された国際宣教協議会(IMC)によってリードされてきたが、福音派は1950年代頃から徐々に自分たちの宣教理解との間に隔たりを意識するようになる。その関係は1961年に国際宣教協議会が世界教会協議会(WCC)に統合されたことで、いよいよ決定的なものとなった<sup>24</sup>。この統合は19世紀の宣教団体主導の宣教活動の在り方にピリオドを打ち、宣教活動は地域教会によって担われるべき働きであるとする神学的確信を組織的に反映させる試みであった。しかし、福音派陣営の多くの人々はこの統合が世界宣教に対する情熱とコミットメントを弱体化させるとして反対の声を上げた<sup>25</sup>。

エキュメニカル派の宣教理解に危機感を覚えた福音派の指導者たちは一致協力して独自の宣教理論を明確に提示していく必要性に迫られた。1966年の4月にアメリカのホイートン大学において、福音派のグループ独自の世界宣教会議(The Congress on the Church's Worldwide Mission)が開催された。この会議の目的は「教会の普遍的な宣教についての理論と戦略と実践を明示すること」であっ

23 Stephen Neill, *Creative Tension* (London: Edinburgh House, 1959), 81.

24 WCCに統合されたIMCはThe Commission on World Mission and Evangelism (CWME)と名称を改めた。

25 この時代の代表的な宣教学者であったマックス・ウォーレン(Max Warren)もこの統合に反対を唱えた一人である。詳細はTimothy Yates, *Christian Mission in the Twentieth Century* (Cambridge: Cambridge University, 1994), 155ff; Roger E. Hedlund, *Roots of the Great Debate in Mission* (Madras, India: Evangelical Literature Service, 1981), 87を参照。

た<sup>26</sup>。この会議の議論の果実として『ホイートン宣言』が採択された。この宣言文はエキュメニカル派の宣教理論に対する福音派の立場を宣言する形態で記されている。『ホイートン宣言』の宣教観の特色は19世紀の近代宣教運動の潮流を意識的に受け継いでいることにある<sup>27</sup>。この宣言文は1910年のエディンバラ世界宣教会議の標語ともいべき“the evangelization of the world in this generation”という誓約によって締めくくられている。この文言に自らをエディンバラ会議の継承者と位置づける福音派陣営の自己理解を読み取ることができる。

ベルリン会議は全世界に福音を宣べ伝える世界宣教のビジョンを“primacy”（第一義性／優先性）という用語で表現した<sup>28</sup>。これはエキュメニカル派の社会正義の実現に傾斜した宣教観に対する「否」であった。『ホイートン宣言』は社会的課題に関わる必要性を完全に否定していないが、個人的な救済を宣べ伝える伝道の優先性が確保されなくてはならないと論じている<sup>29</sup>。同年、ベルリンにおいて宣教会議が開催されたが、この会議の主要なテーマは伝道であった。この会議の目的の一つは聖書的に伝道を定義することであり、伝道に対するネガティブなイメージを払拭することにあつた。また、伝道こそが教会の第一義的な務めであることが再確認されている<sup>30</sup>。

初期の福音派の宣教理解において、エキュメニカル派の広げられた宣教理解に対する反動として、救霊の働き（伝道）が教会の第一義的な使命として位置付けられている。すなわち、伝道活動は社会的な取り組みに優先するという立場である。ベルリン会議において、ビリー・グラハム（Billy Graham）は、福音は人間の社会的・道徳的・心理的な領域に重大な影響を及ぼすものと理解し、歴史上の偉大な社会的運動はキリストに導かれたことによって生じたものであり、社会変革は伝道の結実

26 Harold Lindsell, ed. *The Church's Worldwide Mission: An Analysis of the Current State of Evangelical Missions, and a Strategy for Future Activity* (Waco: Word Books, 1966), 3.

27 Rodger C. Bassham, *Mission Theology, 1948-1975: Years of Worldwide Creative Tension; Ecumenical, Evangelical, and Roman Catholic* (Pasadena: William Carey Library, 1979), 212.

28 “Wheaton Declaration: Subscribed by the Delegated to the Congress on the Church's Worldwide Mission; Convened at Wheaton, Illinois, April 9-16, 1966,” *International Review of Mission* 55 (1966): 474.

29 Lindsell, *The Church's Worldwide Mission*, 234.

30 Carl F. H. Henry, and W. Stanley Mooneyham, eds, *One Race, One Gospel, One Task: World Congress on Evangelism, Berlin 1966; Official Reference Volumes; Paper and Reports* (Minneapolis: World Wide, 1967), 22-34.

によってもたらされると論じた<sup>31</sup>。つまり、実を結ぶためにはまず種を植えなければならぬように、社会的責任が果たされるためにはまず伝道という種が植えられる必要がある。このような理解のもと、伝道は最優先されなければならない教会の務めであると理解された。

## (2) ローザンヌ以降の宣教観

1974年のローザンヌ世界伝道会議は福音派の宣教理解の分水嶺として位置づけることができる。ローザンヌ会議はそれまでの「伝道のみ」という宣教観から、より包括的な宣教理解への転換を促した。福音派において社会的活動は伝道に対立するものとして理解される傾向があったが、ローザンヌ宣教会議はそれらを対立構造ではなく、教会の使命の両輪とする理解を提示した。この理解は『ローザンヌ誓約』の第五項「キリスト者の社会的責任」において次のように記されている。

私たちは〔省略〕時には伝道と社会的責任とを互いに相容れないものとみなしてきたことに対し、ざんげの意を表明する。〔省略〕私たちは、伝道と社会的政治的参与の両方が、ともに私たちキリスト者の務めであることを確認する。なぜなら、それらはともに、私たちの神観、人間観、隣人愛の教理、イエス・キリストへの従順から発する当然の表現にほかならないからである。<sup>32</sup>

『ローザンヌ誓約』は率直に一面的な宣教理解に陥った非を認め、社会的責任を教会の使命のもう一つの車輪として明言している。しかし、このことは伝道を教会の最優先の課題とする初期の見解を放棄したことを意味しない。第六項「教会と伝道」では、宣教活動における伝道の第一義性 (the primacy of evangelism) について、「犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである」と断言している。さらにまた、「人間同士の和解即神との和解ではない。社会的行動即伝道ではない。政治的解放即救いではない」と論じ、社会的責任と伝道の質的な違いについて明言している。

1974年のローザンヌ会議はそれ以前の「宣教＝伝道」という宣教理解と一線を画するものである。「宣教」はもはや「伝道」と同義語ではなく、また単に交換可

31 Henry, *One Race, One Gospel*, 28.

32 ジョン・ストット、宇田進訳『現代の福音的信仰——ローザンヌ誓約』いのちのことは社、1989年〔1976年〕、53頁

能な概念でもない。従来の「伝道のみ」という宣教理解と決別し、より包括的な宣教理解への転換がなされている。このより包括的な宣教理解への転換は教会の使命を「神の派遣」（ミッシオ・デイ）の枠組みで捉え直すことによってもたらされた。『ローザンヌ誓約』の起草者であるジョン・ストット（John R. W. Stott）は主題講演の中で「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わします」（ヨハネ 20:21）の箇所を土台として、「神の派遣」の枠組みで教会の使命を捉え直した<sup>33</sup>。ローザンヌ会議の翌年に出版された *Christian Mission in the Modern World* において、ストットは宣教を「神がその民を世に遣わしてなさしめようとする全てを含む包括的な用語」と再定義している<sup>34</sup>。

### (3) 批判的考察

『ローザンヌ誓約』は「伝道」と「社会的責任」を教会の使命の両輪として理解した。これは包括的な教会の宣教使命を回復するという点で大きな前進であったことは間違いない。しかし、教会の使命を「伝道」と「社会的責任」（伝道+社会的責任）の二つに分離する考え方に関する神学的妥当性を問う声が上がった。また、宣教を伝道と社会的責任の両輪とする理解は、「伝道の第一義性」という命題との関係でどのように理解されるべきかという問いも残されている。ボッシュはこれらの問題について次のように指摘している。

宣教を二つの分離した要素から成るものと捉えた瞬間に、その二つが原則的にそれぞれ独立したものであると認めたことになる。社会的側面なしに伝道をすすめ、伝道的側面なしにキリスト者の社会参与をなすことが可能である、と暗に言っているのである。それ以上に、もし、一つの要素が第一で、もう一つの要素は第二であると示唆するならば、一つは本質的であり、もう一つは任意のものだということになる。<sup>35</sup>

33 John R. W. Stott, "The Biblical Basis of Evangelism," in *Let the Earth Hear His Voice: International Congress on World Evangelization, Lausanne, Switzerland*, ed. J. D. Douglas, 65-78 (Minneapolis: World Wide, 1975), 66.

34 John R. W. Stott, *Christian Mission in the Modern World* (Downers Grove: InterVarsity, 1975), 35.

35 ボッシュ、前掲書、259頁

ポッシュの指摘は伝道と社会的責任の間にある有機的な関係性を問うものであり、また伝道の優先性を主張することで、社会的責任はなおも副次的な務めとして理解されてしまうのではないかという批判である。このような指摘に加えて、ポッシュは社会的責任を伝道の実とする従来の福音派の理解を近代的な「原因—結果思考」であると批判している<sup>36</sup>。

1982年にミシガン州グランド・ラピッズにおいて「伝道と社会的責任との関係に関する協議会」(The Consultation on the Relationship between Evangelism and Social Responsibility、以下 CRESR)が開催された。この協議会において、伝道と社会的責任の関係は「パートナー」であると表現された。また、伝道と社会的責任をそれぞれ固有の働きとしながらも、両者をハサミの二枚の刃のように、また鳥の両翼のように互いに有機的に結びつき補完し合う関係として説明された。両者の有機的な関係性について CRESR は次のように記している。

イエスを主とした救い主と宣べ伝えること(伝道)は社会的意味をもっている。それは、人々を招いて、個人の罪と同様に社会的な罪を悔い改めさせ、新しい社会での義と平和の新しい生活をさせるようにするからである。そして、その新しい社会は古い社会に挑戦するのである。飢えている者に食物を与えること(社会的責任)は伝道的意味をもつ。愛の善い業は、それがキリストの名においてなされるなら、福音の宣伝であり福音を推薦するものだからである。〔省略〕それゆえに、伝道は、それが第一次的には社会的意図をもっていないときでさえ、社会的次元をそなえており、他方、社会的責任は、それが第一次的には伝道的意図をもっていなくても、伝道的次元を備えているのである。<sup>37</sup>

このように、CRESR は伝道と社会的責任を創造的な緊張関係の中で捉えようとしている。この緊張関係は、両者を対立関係において引き離そうとする二元論の誘惑と両者をいっしょくたにしてしまう一元論の危険性に陥らないために必要なものと理解された<sup>38</sup>。

CRESR のレポートは社会的責任に対する伝道の優先性の問題について、従来の

---

36 ポッシュ、前掲書、260頁

37 ローザンヌ世界宣教協議会、唄野隆訳『伝道と社会的責任—グランド・ラピッズ・リポート』(ローザンヌ宣教シリーズ No. 21) いのちのことば社、1984年、22頁

38 ローザンヌ『伝道と社会的責任』、17頁

「社会的行動は伝道の結果である」とする時間的な優先性の議論に加えて、伝道を「人々の永続的な運命に関わる」問題として論じた。また、伝道は「他のだれもができないこと」であるとして、伝道の使命の独自性を伝道の優先性の主張の根拠として提示している。さらに、平時において伝道か社会的奉仕かの二者択一を迫られることはないとした上で、「もし先の両者の間の選択を迫られるなら、われわれは、全人類の至高のそして究極的な必要はイエス・キリストの救いの恵みであり、それゆえに、ひとりの人の永続的な靈魂の救いは、その人の現世的、物質的福祉以上に重要であるといわなければならない（II コリント 4:16-18 参照）」と記している<sup>39</sup>。

福音派の宣教観における「伝道の優先性」の議論は、伝道と社会的責任が混同されることによって、宣教の使命の中での伝道の位置づけが曖昧にされてしまうことへの警鐘として理解されるべきであろう。宣教は伝道よりも広い包括的な概念であり、それゆえ宣教と伝道は同義語ではない。しかし、宣教の中心がキリストの贖罪の業にあるのであれば、伝道は教会の使命の中心点としての明確な位置づけが与えられなければならないであろう。「福音的であることは、すなわち社会的であることであるが、しかしその逆は必ずしも真ではない」からである<sup>40</sup>。それゆえ、キリストの十字架と贖いを宣べ伝える働きである伝道の業は過去・現在・未来においても宣教の中心軸として据えられなければならないのである。

#### 第4節 「教会の使命」再考

本節において、これまでの議論を踏まえつつ、教会の宣教使命の内容について検討していきたい。宣教は教会の本質的な使命であり、教会がその本質的な召しに従順であろうとするとき、その使命理解は創造論的射程をもたなければならない。このような主張は伝道を教会の最も重要な使命とする人々を不安にさせるが、それは救いの理解が狭義に規定されているからである。救いの理解は直接的に宣教理解に影響を及ぼす。一般的に救いは個人の魂の救いのことであり、神の怒りから逃れ、天国における永遠の命を得ることだと理解されている。しかし、罪の赦しを与えることがキリストの贖いの最終目標ではない。もし人類をこの地上から救い出すことが最終目標であるとするなら、神は人類を救うために創造されたことになってしまう。救いは聖書のグランド・ナラティブ（創造→墮落→贖い→完成）において理解

39 ローザンス『伝道と社会的責任』、23頁

40 森野善右衛門『派遣される教会』（教会と宣教双書 13）新教出版社、1988年、46頁

される必要がある。キリストの贖いの最終目標は神の国の完成であり、創造の回復にある。キリストの贖いの目標はこの世からの救い (*salus e mundo*) ではなく、この世の救い (*salus mundo*) にある<sup>41</sup>。それゆえ、教会の使命もまた神の国、そして創造の回復を目指すものでなくてはならないのである。そうであるなら、教会の使命は救済論を中心点としつつも、その射程は創造論を基調としていなければならないであろう。すなわち、教会の使命は救済論的中心点と創造論の射程の両方を兼ね合わせもつのである。

それでは具体的な教会の使命とは何であるのだろうか。1952年のウィリンゲン会議は教会の使命の全体をマルチュリア (証し) と表現し、その具体的な内容をケリユグマ (宣言)・ディアコニア (奉仕)・コイノニア (交わり) と理解した。この理解は20世紀のプロテスタント宣教思想において最も適切な包括的な宣理解とされてきた。以下において、これまでの議論を踏まえつつ、これら3つの教会の使命の要素について考えていきたい。

### (1) 伝道 (ケリユグマ)

宣教は包括的な教会の使命を表す用語であるため、その概念を伝道だけに還元することはできない。しかし、伝道を教会の使命の単なる一つの働きとするのは誤りである。なぜなら、伝道は教会の包括的な務めにおいて独自性と中心性を有するからである。すなわち、伝道は教会の使命の中心点であると同時に、教会だけがなすことができる唯一無二の働きであるからである。それゆえ、伝道を教会の働き全体の本質的な務めとして位置づけることができる。ボッシュは福音を未信者に伝える伝道の業は、宣教の中心 (center) であり、核 (core)、心臓 (heart) であると表現している<sup>42</sup>。教会はどのような活動を自らの使命に加えたとしても、福音の宣言だけは決して除外してはならないのである<sup>43</sup>。キリストによって成就した神の救済の業を明示的に宣べ伝える働きを宣教の営みから取り除くことは、キリストの贖いの業そのものを軽んじることになる。この点において、福音派は正しかったとい

---

41 Anna Marie Aagaard, "Missio Dei in katholischer Sicht," *Evangelisch Theologie* 34: 429-31. ボッシュ、前掲書、248頁からの引用。

42 ボッシュ、前掲書、271頁

43 Craig Ott, Timothy C. Tennent, and Stephen J. Strauss, *Encountering Theology of Mission: Biblical Foundations, Historical Developments and Contemporary Issues* (Grand Rapids: Baker Academic, 2010), 110.

える。しかし、福音派の宣教観の問題点は「伝道のみ」という還元主義に陥り、個人主義的・霊的回心主義に隔たってきたことにある。

伝道は教会のその他の使命、すなわちディアコニアとコイノニアの営みから切り離されてはならない。伝道は常に社会的次元（ディアコニア）を含み、教会が語る神の国の福音は、それによって生かされている信仰共同体（コイノニア）の存在によって真正（authentic）なものとして証しされるからである。

## (2) 奉仕（ディアコニア）

ディアコニアは新約聖書において「仕える」（マタイ 20:28）、「世話をする」（マタイ 25:44）、「給仕する」（ルカ 12:37; ヨハネ 12:2）などを表す用語として用いられている。そもそも、それらの働きは主に奴隷や身分の低い人々の仕事とされてきたが、この概念がイエスの教えと行動において積極的なキリスト者の模範とされていることは注目すべきことである（マタイ 20:26-27; 23:11; マルコ 9:35; 10:43-45; ルカ 9:48; 22:26）<sup>44</sup>。

『ローザンヌ誓約』はこのディアコニアの側面を教会の使命として明言した。しかしながら、福音派において伝道を唯一の教会の本質的な使命として規定しようとする傾向は未だに強くある。教会の社会的関わりを少なからず認める人々であっても、それらを伝道の副産物または二次的なものとして位置づける傾向がある。しかし、社会的奉仕は本質的な教会の使命として位置付けられなければならないのである。なぜなら、ロナルド・サイダー（Ronald J. Sider）が指摘するように、キリストは教会に“the Great Commission”（大宣教命令）だけではなく、“the Great Commandment”（隣人愛の戒め）をも命じておられるからである<sup>45</sup>。

チャールズ・ヴァン・エンゲン（Charles E. Van Engen）はディアコニアの働きを副次的な働きまたは伝道のためのアウトリーチとしてではなく、キリストの主権のもとにおける再創造の業に参加することであると指摘している<sup>46</sup>。すなわち、教会は不義の中であって苦しむ世界のまっただなかで、人間社会全体における正義と和解のために、またあらゆる種類の抑圧に対して、ただ単に神の国の福音を語る

44 森野、前掲書、81-92頁

45 Ronald Sider, *Evangelism, Salvation and Social Justice* (Bramcote Notts: Grove Books, 1977), 19.

46 Charles E. Van Engen, *God's Missionary People: Rethinking the Purpose of the Local Church* (Grand Rapids: Baker, 1991), 96.

だけでなく、それを現実に押し広める働きを担う責任を必然的に帯びているということである。それゆえ、神の正義の実現と隣人愛の実践は、教会の本質的な働きであると同時に、創造の回復に生きる民の必然的な営みとして位置付けられなければならないのである。

### (3) 交わり (コイノニア)

『ローザンヌ誓約』において、教会は「福音伝播のために神が定められた手段である」と同時に、「神の宇宙大の目的の中心」として理解されている<sup>47</sup>。すなわち、神の民である教会は福音を宣べ伝える使命(ケリユグマ)と共に、この地上において、「被造物の初穂」(ヤコブ 1:18)として、また「真理の柱/土台」(1テモテ 3:15)として、自らが宣べ伝える福音を体現する共同体となるように召されている。それゆえ、教会の共同体としての具体的な営みのすべてが宣教的意義をもつ。教会はこの世における神の国の到来のしるしであり、前味である。ニュービギンはこの教会論的側面の意義を「イエスは書物ではなく共同体を残した」と表現している<sup>48</sup>。福音がこの世において比類のないものであるように、教会もまたこの世で唯一の共同体となるように召されているのである。

キリスト教倫理学者であるスタンリー・ハワーワス(Stanley Hauerwas)は教会の最も根本的な社会的使命は「教会が教会であること」であると表現している<sup>49</sup>。教会はこの世にありながら、神の真理を指し示す存在である。すなわち、神の民である教会はこの世から逃避するという消極的な態度ではなく、積極的に福音によって自らの共同体の存在と生き様(倫理)をモデルとして世界に対して提示し、対峙していく共同体である。バルトの言葉を借りるならば、教会は「世に対しての対立においてこそ世に属するものであり、世との違いにおいてこそ世に対して無関心で

---

47 『ローザンヌ誓約』〔第六項 教会と伝道〕を参照。『ローザンヌ誓約』は一般的に伝道と社会的責任を教会の使命の両輪と捉える包括的な宣教理解に貢献した文書として知られているが、教会理解の観点においても重要な転換点であった。詳しくは以下の拙論を参照。篠原基章「宣教の民としての教会論—福音派の宣教の神学における宣教的教会論の意義を巡って」(『宣教学ジャーナル』第8号、2014年、38-63頁)

48 Leslie Newbigin, *The Gospel in a Pluralist Society* (Grand Rapids: Eerdmans, 1989), 227.

49 Stanley Hauerwas, *The Peaceable Kingdom: A Primer in Christian Ethics* (Notre Dame: University of Notre Dame, 1983), 100.

あり得ず、もっとも深い連帯性と責任をもって世に対する」のである<sup>50</sup>。

教会と訳されたギリシャ語のエクレーシアは「召集する」を意味するエカレオーの動詞からの派生語であるが、元来、エクレーシアはポリス（民主的都市共同体）の自由人らによる集会を指す用語であった<sup>51</sup>。この集り（エクレーシア）において、法律の制定や変更、公的役職の任命、内政、外交、裁判などの諸問題が議論され、取り決めがなされた。「統治」という類比点から教会（エクレーシア）を考えていくとき、教会の宣教的使命を新鮮な視座において捉え直すことができるであろう。すなわち、教会は御国の代理者としてこの地上を治める使命が委ねられているということである<sup>52</sup>。

## 結 論

宣教はこの世に対する父なる神の愛から湧出した救いの計画に起源をもっている。それゆえ、「なぜ宣教なのか」を問うことは、「なぜ神はご自身の被造物を愛するのか」と問うことと同じことである。教会はこの神の愛の宣教の業に参加するために主キリストによって召し出され、この世に遣わされた宣教の民である。それゆえに、宣教は教会のなすべき活動の一つではなく、教会は宣教そのものである。

この小論において、20世紀におけるエキュメニカル派と福音派の主要な宣教理解を踏まえつつ、教会の使命について検討してきた。宣教の起源は神の派遣にあり、教会の使命はこの派遣的（宣教的）性質を基盤としている。教会は神の宣教の業に参加するために主キリストによって召し出され、この世に遣わされた宣教の民である。それゆえ、宣教は教会の使命を包括的に表現する概念として位置づけることができる。教会に委託された包括的な宣教の使命はキリストの十字架の死と復活によってもたらされた神の国の到来を証し（マーチュリア）することである。教会の使命は救済論を中心軸に据えつつ、創造論に根ざした射程をもつ。この2つの側面を統合的に捉えていくことが重要である。

教会の使命は言葉（ケリユグマ）と行為（ディアコニア）を通して福音を証しす

50 バルト、前掲書、169-170頁

51 ウェイン・A・ミクス、加山久夫監訳『古代都市のキリスト教—パウロ伝道圏の社会学的研究』ヨルダン社、1989年、274頁

52 「宣教」の訳語と同様に、「教会」の訳語もまた限定的な意味内容を持つ訳語として理解されなくてはならないであろう。

ることであり、神の民である教会は福音による被造物の初穂として、この地上において神の国の完成を待ち望みつつ、その前味となるべく召されている(コイノニア)。教会はこれらの3つの要素を統合的に、しかも大胆に実践するようにと召されている。教会は福音を告知し、実践し、体現するために召され、その使命のために自らを建て上げるために存在する。教会は遣わされた存在であり、その宣教的本質に忠実である時、教会はまさに宣教そのものとなるのである。

[参考資料]

- Aagaard, Johannes. "The Main Trend in Modern Protestant Missiology." *Studia Theologica* 19 (1965): 238-59.
- Bassham, Rodger C. *Mission Theology, 1948-1975: Years of Worldwide Creative Tension; Ecumenical, Evangelical, and Roman Catholic*. Pasadena, CA: William Carey Library, 1979.
- Bevans, Stephen B., and Roger P. Schroeder. *Constants in Context: A Theology of Mission for Today*. Maryknoll: Orbis, 2004.
- Blauw, Johannes. *The Missionary Nature of the Church: A Survey of the Biblical Theology of Mission*. New York: McGraw-Hill, 1962.
- Bosch, David. *Witness to the World: The Christian Mission in Theological Perspective*. Atlanta: John Knox, 1980.
- Bosch, David. *Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission*. Maryknoll, NY: Orbis, 1991. (デイヴィッド・ボッシュ、東京ミッション研究所訳『宣教のパラダイム転換 下巻—啓蒙主義から21世紀に向けて』(東京ミッション研究所選書シリーズ)、新教出版社、2002年)
- Bosch, David. "Evangelism: Theological Currents and Cross-Currents Today." In *The Study of Evangelism: Exploring a Missional Practice of the Church*. Paul W. Chilcote and Lacey C. Warner, eds, pp.4-17. Grand Rapids: Eerdmans, 2008.
- Engelsviken, Tormod. "Missio Dei: The Understanding and Misunderstanding of a Theological Concept in European Churches and Missiology." *International Review of Mission* 92 (2003): 481-97.
- Goheen, Michael W. "'As the Father Has Sent Me, I am Sending You': Lesslie Newbigin's Missionary Ecclesiology." *International Review of Mission* 9 (2002): 354-69.
- Günther, Wolfgang. "The History and Significance of World Mission Conferences in the 20th Century." *International Review of Mission* 92 (2003): 521-37.
- Hauerwas, Stanley. *The Peaceable Kingdom: A Primer in Christian Ethics*. Notre Dame:

- University of Notre Dame, 1983.
- Hedlund, Roger E. *Roots of the Great Debate in Mission*. Madras, India: Evangelical Literature Service, 1981.
- Henry, Carl F. H. and W. Stanley Mooneyham, eds, *One Race, One Gospel, One Task: World Congress on Evangelism, Berlin 1966; Official Reference Volumes; Paper and Reports*. Minneapolis, MN: World Wide, 1967.
- Hoekendijk, Johannes Christiaan. "The Church in Missionary Thinking." *International Review of Mission* 41 (1952): 324–336.
- Hoekendijk, Johannes Christiaan. *The Church Inside Out*. Philadelphia: Westminster, 1966.
- Hoekendijk, Johannes Christiaan. "A Statement on the Missionary Calling of the Church." *International Review of Mission* 92 (2003 [1952]): 606–09.
- International Missionary Council. *Missions under the Cross: Addresses Delivered at the Enlarged Meeting of the Committee of the International Missionary Council at Willingen, in Germany, 1952; With Statements Issued by the Meeting*, Norman Goodall, ed. London: Edinburgh House, 1953.
- Lindsell, Harold, ed. *The Church's Worldwide Mission: An Analysis of the Current State of Evangelical Missions, and a Strategy for Future Activity*. Waco: Word Books, 1966.
- Müller, Karl. *Mission Theology: An Introduction*. Nettetal: Steyler Verlag, 1987.
- Neill, Stephen. *Creative Tension*. London: Edinburgh House, 1959.
- Newbigin, Lesslie. *The Household of God: The Lectures on the Nature of the Church*. London: SCM, 1953.
- Newbigin, Lesslie. *One Body, One Gospel, One World: The Christian Mission Today*. London: International Missionary Council, 1958.
- Newbigin, Lesslie. *The Relevance of Trinitarian Doctrine for Today's Mission*. London: Edinburgh House, 1963.
- Newbigin, Lesslie. *The Gospel in a Pluralist Society*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1989.
- Ott, Craig, Timothy C. Tennent, and Stephen J. Strauss. *Encountering Theology of Mission: Biblical Foundations, Historical Developments and Contemporary Issues*. Grand Rapids: Baker Academic, 2010.
- Phillip, T. V. *Edinburgh to Salvador: Twentieth Century Ecumenical Missiology; A Historical Study of the Ecumenical Discussions on Mission*. Delhi: CSS & ISPCK, 1999.
- Rosin, H. H. *Missio Dei: An Examination of the Origin, Contents and Function of the Term in Protestant Missiological Discussion*. Leiden: Inter-university Institute for Missiological and Ecumenical Research, 1972.
- Scherer, James A. *Gospel, Church, and Kingdom: Comparative Studies in World Mission Theology*. Minneapolis: Augsburg, 1987.

- Sider, Ronald. *Evangelism, Salvation and Social Justice*. Bramcote Notts: Grove Books, 1977.
- Snyder, Howard A. "The Church as God's Agent in Evangelism." In *Let the Earth Hear His Voice: International Congress on World Evangelization, Lausanne, Switzerland*. J. D. Douglas, ed., 327-60. Minneapolis: World Wide, 1975.
- Stott, John R. W. "The Significance of Lausanne." In *The Study of Evangelism: Exploring a Missional Practice of the Church*. Paul W. Chilcote, and Lacey C. Warner, eds., 305-12. Grand Rapids: Eerdmans, 2008.
- Stott, John R. W. *Christian Mission in the Modern World*. Downers Grove: InterVarsity, 1975.
- Stott, John R. W. "The Biblical Basis of Evangelism," in *Let the Earth Hear His Voice: International Congress on World Evangelization, Lausanne, Switzerland*, ed. J. D. Douglas, 65-78. Minneapolis: World Wide, 1975.
- Stott, John R. W., ed. *Making Christ Known: Historic Mission Documents from the Lausanne Movement 1974-1989*. Grand Rapids: Eerdmans, 1996.
- Van Engen, Charles Edward. *God's Missionary People: Rethinking the Purpose of the Local Church*. Grand Rapids: Baker, 1991.
- Van Engen, Charles Edward. *Mission on the Way: Issues in Mission Theology*. Grand Rapids: Baker Books, 1996.
- "Wheaton Declaration: Subscribed by the Delegated to the Congress on the Church's Worldwide Mission; Convened at Wheaton, Illinois April 9-16, 1966." *International Review of Mission* 55 (1966): 458-76.
- Yates, Timothy. *Christian Mission in the Twentieth Century*. Cambridge: Cambridge University, 1994.

アンダーソン、ジェラルド・H 編、土井真俊訳『福音宣教の神学』日本基督教団出版局、1969年  
石田学、松田和憲、鈴木脩平、濱野道雄『宣教ってなんだ？—現代の課題と展望』キリスト新聞社、2012年

近藤勝彦『伝道の神学—21世紀キリスト教伝道のために』教文館、2002年

シーゲル、M『福音と現代—宣教学の視点から』（南山大学学術叢書）サンパウロ、2005年

ジョンソン、B・C、吉田信夫訳『これからの福音宣教像—神学と方法の再考』日本基督教団出版局、1996年

ストット、ジョン、宇田進訳『現代の福音的信仰—ローザンヌ誓約』いのちのことは社、1989年（1976年）

篠原基章「宣教の民としての教会論—福音派の宣教の神学における宣教的教会論の意義を巡って」（『宣教学ジャーナル』第8号、2014年、38-63頁）

新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大辞典』第3巻、研究社、2002年  
日本ローザンヌ委員会訳『ケープタウン決意表明』いのちのことば社、2011年  
バルト、カール、井上良雄訳『地上を旅する神の民——バルト「和解論」の教会論』新教出版社、2008年  
ボンフェッファー、ディートリッヒ、倉松功・森平太訳『抵抗と信従』新教出版社、1964年  
ミークス、ウェイン・A、加山久夫監訳『古代都市のキリスト教——パウロ伝道圏の社会学的研究』ヨルダン社、1989年  
森野善右衛門『派遣される教会』（教会と宣教双書13）新教出版社、1988年  
ローザンヌ世界宣教協議会、唄野隆訳『伝道と社会的責任——グランド・ラピッツ・リポート』（ローザンヌ宣教シリーズ No. 21）いのちのことば社、1984年